

聖書：ヨハネの黙示録 20：4～6

説教題：キリストとともに治める

日時：2021年9月19日（朝拝）

ヨハネの黙示録第20章は千年王国について意見が分かれるところです。前回、代表的な3つの見方について述べました。一つ目は「キリストの再臨がまず先に来る。それからこの地上に千年王国と呼ばれる時代が始まる」という見方です。千年王国の前にキリストの再臨が起こると考えるので前千年王国説（プレミレ）と呼ばれます。二つ目は「まず歴史の中で千年王国と表現されるキリスト教的繁栄の時代が現れる。そしてそのクライマックスにキリストの再臨が起こる」という見方です。こちらは千年王国の後にキリストが再臨するので、後千年王国説（ポストミレ）と呼ばれます。そして三つ目は千年王国は地上に起こるものではないという見方です。「黙示録20章の千年の統治は殉教者を代表とする信仰を全うした死んだ聖徒たちが、キリストの復活から再臨までの期間、天でキリストと王権をともにしていることを意味する」と見る見方です。こちらは地上に千年王国は起こらないと見るため、無千年王国説（アミレ）と呼ばれます。地上でそれは起こりませんが、天では現在進行形でそのことが実現しているため、現在千年王国説と呼ぶ人もいます。

さていよいよ今日の4～6節にかけて、いわゆる千年王国を示唆する言葉が出て来ます。4節の終わりに「彼らは生き返って、キリストとともに千年の間、王として治めた」とあります。6節の最後にも「キリストとともに千年の間、王として治める」とあります。この信者たちによる千年間に亘るキリストとの共同統治を指して一般に「千年王国」と呼ばれているわけです。

では今日の箇所を見て行きますが、まず注目すべきはこれほどにおける出来事を述べたものかということです。4節に「また私は多くの座を見た」とあります。この「座」はどこにある座でしょうか。ヨハネの黙示録に「座」という言葉は合計47回出て来ますが、そのほとんどが天にある座を指しています。例外は3か所、2章13節、13章2節、16章10節です。これらは順にサタンの座、竜の座、獣の座で、いずれもサタンの座に関係するものです。それ以外はすべて天における座です。これ一つを取って見ただけでも、今日の箇所の幻は天の光景を描いたものだろうと考えられます。

ではその座に座っている者たちは誰でしょうか。彼らにはさばきを行う権威が与えられたとありますが、その彼らについて4節の真ん中に「イエスの証しと神のことばのゆえに首をはねられた人々のたましい」とあります。つまり殉教者のたましいです。その彼らについて続いてこう記されています。「彼らは獣もその像も拝まず、額にも手にも獣の刻印を受けていなかった。」このように主に忠実に歩み、殉教した人たちの魂があるところはどこでしょう。思い起こすのは黙示録6章9～11節。6章9節に「私は、神のことばと、自分たちが立てた証しのゆえに殺された者たちのたましいが、祭壇の下にいるのを見た」とありました。その人々は大声で「聖なるまことの主よ。いつまでさばきを行わず、地に住む者たちに私たちの血の復讐をなさないのですか」と叫んでいました。その「彼ら一人ひとりに白い衣が与えられた」とそこで言われていました。この人々と今日の箇所4節の人々は同じであると考えられます。ここからも今日の箇所の舞台は「天」と考えられます。信仰を全うして天に召され、最後のさばきと復活の日を待っている人々のたましいがここで見つめられています。その彼らが天でキリストとともに王として治めたということをここは語っていることになりそうです。

その彼らについて4節に「彼らは生き返って」とあります。これを巡って少し込み入った意見の違いがあります。ポイントは「生き返って」という表現は肉体の復活を意味するのか、それとも別の意味なのか。ある人々はこれを肉体的復活のことだと考えます(プレミレ)。その人々は5節の「残りの死者は、千年が終わるまでは生き返らなかった」という言葉に注目して、これは残りの死者が千年後に生き返ることを意味している。それは肉体の復活を意味するはずである。とするなら4節の「生き返って」という言葉は5節の言葉と同じだから、4節も同様に肉体の復活を意味しなければならない。そして千年の終わりに復活する人々に先立って、千年王国の始まりにある人々が肉体的に復活するから、それを指して5節最後に「これが第一の復活である」と言われているとします。この考え方によると、キリストが再臨し、まず殉教者たちが他の死者に先んじて復活の栄光にあずかります(殉教者をどこまで広げて考えるかについては意見の相違があります)。一方、他の死者、一般的な人々は千年の終わりの時、最後のさばきの直前に全員復活します。このように復活は2回起こるとその人々は考えます。ある人々には他の人々より千年も早い復活の祝福が与えられる(主に殉教者を代表とする聖徒たち)。千年後の第二の復活はそれ以外の一般の人々の復活です。一般の人々と言いましたが、第二の復活は不信者がさばかれるための(不信者だ

けの) 復活であると見る人がいる一方で、そこには救われる人と救われない人の両方が混じっていると見る人たちもいます(千年王国の時代に生まれた人など)。

この理論を聞いて皆さんはいかがでしょうか。第1回目の聖徒たちの復活と、その後の一般的な復活との間に千年間ものインターバルがあるというのです。果たしてこのようなことは聖書の他の箇所でも示唆されているのでしょうか。それに大きな問題はこれです。聖書は歴史を大きく「今の世」と「来たるべき世」に分けています。この後、20章11～15節で最後のさばきが行われ、そこで今の世に属する罪や死の問題が最終的に解決されます。その後の21章で新しい天と新しい地、すなわち来たるべき世が現れます。さて黙示録20章の千年期はどちらの時代に属するでしょう。最後のさばきはまだ行われておらず、地上の悪は消し去られていませんから、「今の世」に属していると見るべきです。であるのに、そこに栄光の状態に入っている人がいます! 来たるべき世はまだ始まっていないのに、次の世にいるべき人が今の世にも混在する! これはかなり奇妙な状態ではないでしょうか。

また6節の「第二の死」についても考えたいと思います。「第二の死」は「第一の死」があることを前提とします。第二の死とはこの後20章14節や21章8節に出て来ますように、最後の審判を経てさばかれる人たちが受ける永遠の死を指します。それに対して第一の死はこの世における肉体の死のことでしょう。ここで注目すべきは第二の死を味わう人は第一の死も経験するということです。第二の死を味わわない人もいますが(クリスチャン)、第二の死を味わう人と第一の死を味わう人は重なりません。経験する人は両方経験します。ところがプレミレの考え方では第一の復活と第二の復活はそういう関係になっていません。先に見たように第一に復活にあずかるのは殉教者などの聖徒たちであり、その他の人々は第二の復活において復活します。それぞれの復活に該当する人々は別です。第一期復活組と第二期復活組のメンバーは重なりません。これは第一の死と第二の死の考え方と合わないのではないのでしょうか。むしろここは平行関係を考慮して次のように考えるべきではないのでしょうか。第二の死は究極的な死で、第一の死は予備的な死である。第一の死は究極的な第二の死を指し示すものです。同じように第二の復活こそ聖書が語る究極的な復活であり、第一の復活はそれを指し示す予備的なものである。ですから第一の復活を最終的な肉体の復活と理解すべきではないこととなります。それは最終的な復活につながる、その前段階のレベルのものと考えべきでしょう。

では4節の「生き返って」という部分をどう理解すべきでしょうか。これは地上で死んだ信者が天で「生きている」ことを示すものと考えられます。ちなみに日本語で「生き返って」と訳されている言葉は、通常「生きる」とか「生きている」と訳される言葉です。ですからここは「彼らは生き返って」ではなく、「彼らは生きていて」と訳せば十分です。おそらく5節の第一の「復活」という言葉に影響されて、「生き返る」と訳したのだと思います。これは肉体の復活を伴う最終的な復活ではなく、そこに至る予備的な段階を指すと考えられます。たとえばパウロはピリピ人への手紙1章23節で言います。「私の願いは、世を去ってキリストとともにいることです。そのほうが、はるかに望ましいのです。」世を去ったクリスチャンは、地上にはるかに勝る「キリストとともにいる」という幸いな状態に至ると言われています。あるいはコリント人への手紙第二5章8節でもパウロは言います。「むしろ肉体を離れて、主のみもとに住むほうがよいと思っています。」こちらでも、肉体を離れて死を越えた先にあるのは「主のみもとに住む」と表現されるさらに勝る状態であると言われています。あるいはイエス様は復活を否定するサドカイ人たちが意地の悪い質問をして来た時、モーセが「アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神」と主を呼んだことを引き合いに出して、ルカの福音書20章38節でこう言われました。「神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神です。」イエス様はここで、信者でこの世を去った者たちは、やがての復活が起こる以前の今も「生きている」と言われました。このいのちの状態のことを黙示録20章4節は語っていると考えられます。一方、5節で残りの死者、すなわち聖徒でない人々は、この期間、生き返らなかった（生きていなかった）と言われています。つまり信者たちがあずかっているいのちにあずかっていない。その幸いな状態にないということです。このような天に召された聖徒たちの祝福の状態を指して5節後半で「これが第一の復活である」と言われていると考えられます。彼らは人の目には死んだと思われたのに真の意味では生きている！それは一種の「復活」と呼んでも良いような状態です。

6節に「この第一の復活にあずかる者は幸いな者、聖なる者である」とあります。「聖なる者である」という部分は「幸いな者」という意味を強めるための言葉でしょう。この人々に対して「第二の死は何の力も持っていない」とあります。もし第一の復活を肉体的な復活を伴う最終状態と取ると、この6節の言葉は良く意味が通りません。すでに死に完全に勝利したからこそ（Iコリント15章54～55節）彼らは肉体的

に復活する最終状態に達しています。その人々に今さら「第二の死は何の力も持っていない」と述べることは不要です。しかし今まで見て来た通り、第一の復活を、信者たちのたましいが天でキリストのもとで享受している幸いを指すと取ると意味があります。第二の死が起こるのはこの後の最後の審判においてですが、先に見た意味において「第一の復活」の祝福にあずかっている者たちに対しては、第二の死は何の力も持っていない。彼らは恐るべき第二の死、永遠の死から確実に守られるのです。

そして最後に「彼らは神とキリストの祭司となり、キリストとともに千年の間、王として治める」とあります。祭司とは神のみそばで親しく仕え、神を礼拝する人を指します。このあと 21～22 章で、新しい天と新しい地に入った聖徒たちが神とキリストのみそば近くで仕え、礼拝する様子が記されます。しかしその祝福はクリスチャンの死後、いわゆる中間状態においても始まるということです。地上で経験した以上のレベルで、神とキリストのそばで仕え、礼拝生活をする者となる。またこの千年という期間、キリストとともに王として治めるとあります。キリストとの共同統治については黙示録の最初の方で約束されていました。2 章 26 節：「勝利を得る者、最後までわたしのわざを守る者には、諸国の民を支配する権威を与える。」 3 章 21 節：「勝利を得る者を、わたしとともにわたしの座に着かせる。それは、わたしが勝利を得て、わたしの父とともに父の御座に着いたのと同じである。」 この約束が究極的に実現するのは同じく新しい天と新しい地においてです。しかし信者が天に上げられた直後から、そこにつながるような、それを先取りするような祝福の状態が始まるのです。言うまでもなく真の意味でこの世界全てを治めるのはキリストです。しかし信仰の生涯を全うして死んだ聖徒たちは天に上げられて後、直ちにキリストとともに治めるという立場に就かせられる。キリストの御心を分かち合っただき、その御心を今や良く知っている者たちとして、まことの王キリストの統治とさばきに心から同意し、それを賛美し、あるいは何らかの意味でその手段として用いられつつ、共同統治の特権にあずかる。やがての再臨が起こるまでの千年と呼ばれる期間、この祝福に生きる！ということがここに言われていると考えられます。

この箇所をこのように理解する時、このヨハネの黙示録の中心メッセージがはっきり浮かび上がって来ると思います。この黙示録が書かれた当時の教会はローマ皇帝ドミティアヌスの迫害下に置かれていました。皇帝礼拝に屈せず、偶像礼拝において妥協しない主に忠実なクリスチャンたちは社会から疎外され、困難な状態に追いやられ

ました。著者ヨハネはパトモス島に島流しにされましたし、すでに殉教の死を遂げる仲間たちも出始めていました。そんな中、偶像礼拝や皇帝礼拝をしても問題ないと主張する偽預言者も教会内部にいました。この状況で果たしてどうしたら良いのか。信仰を貫いたために死をもって報いられた兄弟姉妹はどうなったのか。彼らは無駄な死に方をしたのか。そのような恐れと問いに対して今日の箇所は答えています。地上で信仰の生涯を全うした聖徒たちは今、天にあってキリストとともに治める王権にあずかっている！サタンに勝利し、サタンを縛っている王キリストと結ばれ、この世のすべてをその王とともに治めるといふ栄光ある立場に導き入れられている！と。2章10節に「見よ。悪魔は試すために、あなたがたのうちのだれかを牢に投げ込もうとしている。あなたがたは十日の間、苦難にあう」という言葉がありました。もしこの十日という数字と今日の箇所の千年という数字が対比されているとしたら、どんなメッセージが出て来るでしょう。地上での苦しみは10日間です。しかし主に忠実に歩んだ者には千年間の王としての生活が待っている。今の時の軽い苦難は、やがてそれとは比べものにならない重い永遠の栄光をもたらすというみことばが思い起こされます。この祝福は天に召された直後から彼らに与えられるものなのです。ですから恐れずに主を告白し、主に従う生活を続けるように！とこの幻は読者たちを励ましています。死に至るまであなたがたは忠実に歩み、この幸いに入るように！と。

私たちの先に信仰の戦いの道を進んだ先達たちは、主を告白しつつ地上の生涯を全うし、今、天においてキリストとともに再臨までの千年間、王として治めっていると聖書は語ります。このことを見上げて私たちもこの約束に励まされる歩みをささげたいと思います。困難の中でも主を主と告白し、主にこそ従い、天に召された暁にはまず第一の復活の祝福にあずかる者へ。そして最終的な御国の完成を待ち望みつつ、再臨の日を待つ千年間と呼ばれる期間においても、キリストとともに治めるといふ栄えある働きと特権に生かされる者へ導かれないと思いません。